

“英文の精神” — 内村の英語教育論

内村に“外国語の研究”という著作があることはすでに述べたが、¹⁶ 彼の英語教育論とも言うべきこの名著を、あらためて少しくわしく紹介して、小論の結びとすることにしたい。

“外国語の研究”は、12歳で初めて英語に接してからほぼ10年間、外国留学をしたと同じ程度に英語に浸って生活し、その後さらに実際にアメリカに留学して英語を身につけた著者が、その体験から、外国語を学ぶことの意義と目的と実際とを率直、明解に語ったものである。具体的、実際の論述ではあるが、同時にそれは、英語とともに、英語によって人間形成を行った若き日の内村の精神の軌跡でもある。もちろん彼の所説に古びたところが無くはないが、この本がいまなお英語学習者に多くの示唆と、力強い奨励とを与えるものであることは確かであろう。

内村はまず本書の冒頭に

一外国語を曉得するは一新世界を發見することなり。²⁷

というゲーテの言葉を引いて、“外国語の研究の利益”(第1章)を論じ、

外国人の思想をその最善最美の点において探らんと欲せば、吾人は外国語の深き精しき研究を要す。

と、外国語学習の必要性を説いている。

しかし“外国語の深き精しき研究”は決して容易なことではない。なぜなら

英語はわれ(日本人-筆者)において言語学上何らの関係あるなし。彼の語体において、彼の文法において、彼の思想において、彼はわれにとりては異郷、異類、異想の人なり。彼がわれを学び、われが彼を学ぶの困難は、実に彼我の間に存するこの根原的差違に存す。

それゆえ英語学習者は

彼、われに來たり、われ、彼に行き、数年の久しき、彼我の真情を探りつくして、少しく互い

に相知るに至るのみ。吾人、英語に曉通せんとするにあたって、この忍耐寛裕の覚悟なかるべからず。

よく英語を知り、また外国語学習というものの意義と実際とを知りつくした人の言葉と言うべきであろう。

それでは外国語はどのように習得すべきものであるか。第5章はそのものずばり“外国語研究の方法”を論じたものである。この章の始めに内村は次のような注目すべきことを言っている。

吾人これを語学と称するも、言語はもとこれ習慣にして學術にあらず。ゆえに完全にこれを学ぶの法は、これに慣るるにありて、これを文法的に究むるにあらず。外国語研究の法は単に實習の一事にとどまる。

これは単なる方法論のことではなく、言語学習の基本的な考え方を述べたものである。この内村の指摘は、日本の英語教育の根本的な欠陥を衝いてはしないであろうか。

習慣として言語を習うのは、当然のことながら幼少年期にまさるものはない。それが出来ないときは“外国語研究は至難のわざ”となるが、“努めて達し得ざる業にあらず”として、内村は自らの体験から次のような8つの注意を与えている。

一、忍耐なれ。吾人研究の結果のいかに大なるかを思い、阻碍に會うて失望すべからず。……思想の一大新世界を發見せんとす、これに適合する困難なからざるを得ず。

二、通達を計れ。曉得せんとする外国語に対しては、占領せんとする敵国に対する觀念をいだかざるべからず。すなわち討平せざればやまずとの覚悟なり。……語学の「ナマカジリ」ほど無益にして有害なるはなし。

これは何言によらず、安易、速成、浅薄に流れる現代人に対する痛烈な批判である。

三、発音を怠るなかれ。訳解は言語の半解にすぎず。発音は言語の重要部分の一にして、

正確に発音し得ずしてその真意を探る難し。
四、まず四、五百の単語をそらんぜよ。……
これら数百語の選択そのよろしきを得ば、これを基礎として語学の全部を知るの手引きとなすを得べし。

五、規則動詞の変活を熟誦せよ。動詞は実に言語の中心なり。しかしていずれの言語においても難きはその動詞なり。これを曉得するは敵の本城を奪うことなり。

これらの諸注意は、現今の最も新しい英語教育法が説くところと驚くほど合致してしいる。

六、毎日少なくとも愛篇の一句をそらんぜよ。……暗誦は、一には吾人に語的新知識を加え、二には常に吾人の目前に外国語研究の希望を供えて、吾人をして阻碍に会うも蹉躓することなからしむ。

こんにちの英語教育に最も不足しているのがこの暗誦訓練であることは、心ある教師の等しく痛感しているところである。それにもかかわらず暗誦が行われないのは、暗誦するに足る教材がないこと、学習が便利になりすぎて学習者に忍耐がなくなってしまうことなどによるのであろうか。

七、すでに学び得しところを使用せよ。

この六、と七、に彼が例として挙げている文章が、いかにも内村らしい。ジャーナリストとして社会評論の健筆をふるっていた壮年時代の内村をほうふつさせるものである。

Fooleries of the Japanese politicians are truly remarkable

(日本政治家のばかばかしきことは実に非常なり。)

The Government and the Constitutional

Party together rob the people of their scanty subsistence .

(政府と憲政党とは相合して、人民の足らざる産を盗む。

八、執拗なれ。…… 不撓と膠固とは語学研究の秘訣なりと知れ。

本書は全8章から成るが、その最終章は“最

良の英語読本一英訳聖書”である。内村はそこで最も簡潔にして、また最も高尚にして、最も純清なる散文と最も莊嚴なる韻文とをまじえ、ただ一書にしてその中に英語の粋を収めしものは、余は英訳聖書なりと信ず。

と告白し、とくに“ジェームス王の翻訳(欽定英訳一筆者)”は、英国人の“個人的希望と国家的思想”とが凝って成った“一種の創造的製作物”であると激賞している。

この英訳聖書が内村じしんの“最良の英語読本”であって、彼の英文を訓練したばかりでなく、その信仰と思想のすべてを生涯にわたって導き、保ち、養った源泉であったことは、いまさら言うまでもないだろう。彼の英文は当然のことながら、その日本語でさえも、この英訳聖書の影響をふかく刻印している。

以上本書において内村の言わんとしていることは、結局次の言葉に要約されるであろう。

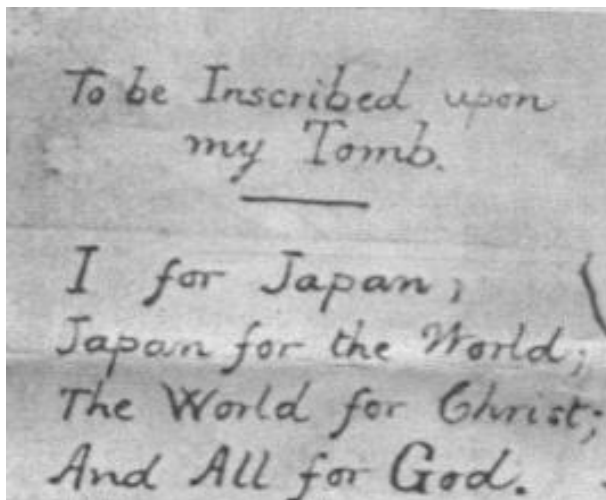
言語は、思想の音声または字形にあらわれしものなり。ゆえに、人の思想に入らずしてその言語を解する難し。しかして言語を学ぶは、そのこれによりてあらわるる思想を解せんがためなり。

同じ趣旨は、彼が“英語の精神”と題するエッセイの中で述べた次の言葉にもよく表明されている。

英学者が英文の精神に入らなかつたら何にもならぬ。英文の精神は文法や修辞学を学んで分かることでない。語学というものは元々其国民の思想である。靈感である。其靈感に接せずして其の言葉を学ぶことは出来ないのである。²⁸

内村は実にこの英文の精神に入った英文家であった。英語の靈感に接し、英語国民の思想をよく理解した思想家であった。それゆえにこそ内村は、ひとりの生粋の日本人として、ある意味で母国語による以上に自由に、英語によって内なる自己を表出し、英語を通しすべての人と自由に思想の交歓をなしえたのであった。外国語学習の意義と目

的とはここに尽きると言うべきであろう。〔完〕



内村がアメリカ留学時代から用いていた聖書の見返し。

わが墓碑銘として一われは日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため、万物は神のためなり。

注

16 はじめ1899（明治32）年1月から4月まで“東京独立雑誌”（内村みづからが主筆となって発行した社会評論誌）に連載され、終るとすぐ5月に単行本として出版された。“信・5”に収録されている。

27 以下引用はすべて“外国語の研究”から。“信・5” P.179～230。

28 “日本の英語100年 明治篇”（既出）P.357。

以上

（所載）「YMCA English Quarterly」No.16
1982年 日本YMCA同盟